

四日市市立山手中学校 3年 田中 月乃「美し国みえ」

三重県は日本最古の正史「日本書紀」に、「可怜国」というように記されました。これは、「美しいよい国である」という意味です。「美しい」には「満ち足りていてこちよい」という意味があります。百五十年生きた三重には「満ち足りていてこちよい」がどれだけつまっているのでしょうか。

そもそも、「満ち足りていてこちよい」とはどのような意味でしょうか。どのような状態が「満ち足りていてこちよい」というものなのでしょう。例えば私は自然の美しさに圧倒されたとき、すごく満ち足りた気持ちになります。なにか、すごく美しいものに会ったとき、私たちは満たされるのではないのでしょうか。例えば、熊野大花火大会。私は幼いころですが、一度見に行ったことがあります。花火が上がっていく、「ひゅるー」という音がしたあと、耳をつんざくような音で夜空にお花が咲きます。はじめて見たしょうげきは忘れられません。五才のころの私のひとみはまさに満ち足りたものだったでしょう。では「こちよい」とは何でしょうか。私は「調和」がとれている状態なのだと思います。熊野大花火大会の例でいえば、花火師の方々と花火と私たちです。あの満ち足りた大きなお花は花火師という職人さんの思いだと思います。そんな思いがのせられた花火をみて私たちはとても満たされます。ここにはまさに調和があります。「満ち足りていてこちよい」とは、人と人、自然と人のあいだで生まれる思いの関係なのだと思います。

未来に生きる三重県民の皆さんにはぜひこの思いの関係を大切にしてほしいと思います。三重に生きる私たちがそのように生きるとは、また三重と私たちが思いの関係でつながることだと思うのです。きっと三重は百五十年前からそうやって人々に愛されていきてきたのです。どうか、この先、また百五十年後も三重県が「美し国」でありますように。